

---

# **とある窒息の置き去り（チャイルドエラー）**

城鬼シオ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある寮素の置き去り（チャイルドエラー）

### 【Zコード】

Z3541V

### 【作者名】

城鬼シオ

### 【あらすじ】

暗闇の五月計画。この計画の被験者の中で、一人の少年がいた。彼はこの計画で生み出された能力を使って、上条当麻たちと共に魔術師や超能力者と戦つていく。  
夏休みが始まるとき、彼の非日常な日々が始まる。

ヒロイン予定キャラは絹旗最愛と黒夜海鳥の一人です。

超スピードペースになると想いますが、宜しくお願ひします。

## 第零話（前書き）

他の作品更新していないし、他に書いた禁書まったく更新していないじやないかつてことは分かっています。

でもさつき思いついたものを書いてみたいんだ。

他の作品も絶対に完結させる。それまでは失踪なんてしない。

… なあ 先生。

「どうしたんだい？ もう僕が手を出すよつない」とは無いこと通りに  
「どうだね？」

「やつじやない。最後に一いつこや、一いつ、我が怨を聞いてくれない  
か？」

「内容にもよるたゞね。でもできるだけのことはやるよ」

「ありがとつ先生。じゃあまよーつて、学校に通わせてくれないか？」

「今年で確か高校生だったね？ それくらいなら問題ないよ。君の  
実力上それなりのところに行けると思つね」

「ありがとつ。一いつ、名前つて変えられるか？」

「できなこことは無いけどね？ でも色々手続きとか、エロカード  
の再発行とかが面倒だね？ そもそも正当な理由がないと改名はで  
きないんだね」

「あの忌々しい記憶を忘れたいだけだ。そもそもあの親がつけた名  
前は気に入らない。」

「…まあ、何とかなるね。事実、置き去りの改名は認められてるか  
らね」

本当に、何から何までありがとつ、先生。

「僕はただ、患者に必要なものをそろえるならどんな事でもするからね?」

先生らしいな、本当に。

「それで、話は戻るけど何処の高校に行きたいんだい?」

「そうだな…。できれば毎日バカやつって楽しい所がいい。

「それならこの前入院した少年がちよつといい学校に入学するらしいね? 彼は寮生活らしいし、学校について色々聞いてみたらいどうだい?」

「そうだな。後で聞いてくるよ。

「ところで新しい名前は考えてるのかい?」

「そうだな…、じゃあ…。

これは、未だ口の運命に気がつかない少年の物語。  
時は受験が終わり、高校の準備期間である春休み。

忌々しき記憶を持つ少年と不幸な少年が出会つてしまい、物語は幕を開ける。

## 第零話（後書き）

他の作品を書くにあたって、結構更新が遅れるかもしません。  
ですが、現在停止している無限掌も夏休み終了までには更新します。  
もう絶対に失踪しない。

## オリキャラの設定（繪書き）

ねかしこむじぬせみくらべとまつりへだち。

## オリキャラ設定

名前、本道 惟数（もとみち ただかず）

能力、「ニアリアルブースト 窒素推進」

詳細、上条と同じ高校に通う能力者。高能力者。

上条と同じクラスで土御門や青ピ、上条と共にバカやつている。  
制服以外だと、白いポロシャツの上に黒の皮のジャケット、そしてジーンズを着用する。

モノクロが好きなので結局服は白と黒の服になる。

ノリがよくて上条を弄ることが多いが面倒見はよく、食費が危うい上条に飯をおごってやったり、食料を分けてやることもしばしば。  
ぐくまれに、上条に勉強を教えることも。

一見まともに見えるが、大のゲーム好きで新作が出るとその日は学校を休んでやりこむ。

必ず同じものを一つ買って、プレイ用と観賞用とで分けていたり、青ピや土御門とは別の方向に変人。好きなシリーズはポケン。（第一～第四世代までプレイ時間カансスト 大会優勝経験あり 現在第五世代プレイ中）

戦闘時は「窒素推進」を生かして前線で戦う。  
また、暗闇の五月計画の被験者。

口調、通常時は上条のように特徴が無いが、能力使用時に精神が高

ぶると、絹旗や黑夜と同じく口調が一方通行の口調になる。

例、「つたく当麻、お前何回此処の過程で躊躇ってんだよ?」

「性格一致HBCD耐熱ドーラー、3徹でようやく来た  
…つてめざパ悪だと…? クソ…やり直しだ…」

「安心していいんだぜエ? 手エ抜かずに本気で行くからよオ  
!」

### 能力詳細、「窒素推進」（エアリアルブースト）

暗闇の五月計画によつて生み出された能力。レベル4。

空気中の窒素操ることができる。

絹旗と黑夜との大きな違いは「動き」に特化されていること。  
一方通行の「ベクトル操作による物体の動き」を擬似的に再現し、  
対象物を弾丸のように飛ばしたり、自身が滑空することも可能。  
ただし、あくまで窒素を使うので血流操作やらはできない。

自身の加速は生命の危機にさらされるが、自身に窒素の層を作ることでGを軽減することができる。

対象にしたものしか速さと向きを変えることができないのが弱点で、  
不意打ちに圧倒的に弱い。同時に効果を及ぼせるのは最大6つまで。  
数が多くなるにつれ、精度が落ちていく。

暗闇の五月計画において、「一方通行の機動性」を植えつけたことで発現したテストモデルであるが故、思考パターンの一部を植えつけられた関係上、能力使用時は一方通行の思考や言動に本来の人格も引き摺られてしまう。

## 第一話（前書き）

今日はオープンキャンパスなので、もういちど来ています。

## 第一話

学園都市。総人口230万人で、そのうちの八割が学生であるという少し変わった都市。

しかし、此処の学生の大半は普通ではない力　　いわば超能力を持つている。

記憶術、暗記術と言った名目でそんな研究や開発が行われている、そんな場所だ。

そしてとある寮に住む一人の男子高校生の「本道惟数もとみちただかず」も、その能力開発を受けた一人であった。

「さて、そろそろだな」

俺は読んでいた新聞紙を置いて、椅子から立ち上がりつて背伸びをする。

パキポキッ、つと子氣味いい音が聞こえてくることから相当な時間、新聞を読み込んでいたようだ。

「どうせ当麻はまた金が無いとか言つてゐるだろうし、昨日のあまり物でも持つていってやるか」

時計はすでに八時を少し回ったくらい。これなら奴も起きているだろ。そんな考えをしながら冷蔵庫を開ける。

「……ん？」

惟数が冷蔵庫を開けて違和感を覚える。むしろ違和感しか覚えない。

（冷蔵庫の中つてこんなに生温かつたか？）

そんなわけが無い。昨日使つたときはしつかり使えたはず。そのときはまだ冷たかった。

「どうなつてんだ？」

原因を探るため、軽く思考の海に飛び込んでみる。

この暑さでぶつ壊れた？ 否、学園都市の進んだ科学力を舐めてはいけない。てか最近新しくしたばつかりだ。

使い方が荒かつた？ 否、その程度で学園都市製のものは壊れない。

そういえばさつきから電化製品がうんともすんとも言わない。普通、こんなにっぺんに壊れることは無い。あるとすれば、

「…停電？」

それくらいしか考え付かない。しかしそれだけじゃ普通は壊れない。冷蔵庫の中身が逝つてしまふくらいだろう。

「やういや昨日、でっかい雷が落ちたよつな音がしたような……」

昨日の天候は晴れ。むしろ快晴。そんな中で雷なんて起こらない。

そうなると高レベルの発電能力者が喧嘩でもしたのだらうか？ どうせよ、被害を受けてるのは俺らである。

「……不幸だ畜生」

あいつの口癖が移ったようだ。だが、この状況下でそれ以外に何を言えど？

「……まあ、飯は途中のコンビニで貰いかずるか…」

（あいつも奢つてやるか…。激しくメンドクサイが）

玄関にあるブレーカーをあげて、靴を履き、鞄を掴んで外に出る。

鍵を掛けるのは忘れない。これ以上の不幸はお断りだ。

『……………』

『……………』

（ウッセーな…。土御門が妹と痴話喧嘩でもしたか？）

土御門とは、俺の二つ隣に住んでこるまあなんつうか、シスコンである。

今更だが俺は寮暮らしをしている。先生とあいつの勧めで此処にしたが、悪くない。

何だかんだで笛とワイワイ騒げるのは面白い。

……話が逸れた。とりあえず、土御門はスルーしてあいつの様子を見に行くか。

(つつても隣だけどな)

隣の部屋のドアノブをひねる。鍵は掛かっていないようだ。無用心なやつめ。

ま、鍵が開いてるなら手間が省けていいか。

「おい当麻、そろそろ行かないと補習に『絶対に許さないんだよ！』  
「ちょっと待て！ 今のは不可抗力で『ガブツ！』ぎゃあああああ  
あ！！ 不幸だああああああああああああああ！」……つてオイ」

何だ何だよ何ですか、この状況。目の前に見える状況を冷静に判断できないぞ。

とりあえず、目の前には今通っている高校を勧めてくれ、俺の親友  
つつつてもいい奴。その名を上条当麻。

そしてもう一人。明らかに日本人でなく、小柄な少女。

うん。これだけならまだいいんだ。問題はその格好。

が ど  
と う  
う 見  
ご て  
ざ も  
い 全  
ま 裸  
し で  
た す  
。 。  
本  
当  
に  
あ  
り

「た、惟数か！？ 助けてくれ！」

「……あーなんだ。仲睦まじい様子ですね。俺はこのまま退散させてもいいぜ」

濟まない当麻。もう俺はお前を日向としか見られない！！

その後しばらく当麻の悲鳴が続き、たすかにかわいそつなので助けてあげました。

## 第一話（前書き）

学校の神羅と塾で忙しそうですね…。

高一でもじょんに忙しこのね…。

## 第一話

「……で、ここにまじりこりとだ？」

「上条さんが聞きたいでですよ……」

「じゃあ何で全裸の少女がいたのか説明してもらいましょうかねえ、当麻君？」

「だからあれは事故なんだあああああああ！」

今現在、説教なう。いやあ、またか当麻にそんな趣味があるとは思わんかった。

「嫌がる少女を部屋に連れてきて必死の抵抗をされた挙句、その現場を友人に発見されたからって、そんなにあせんなよ。そういう性癖なんだよな？」

「だから違つて何度も言つたら……！」

「大丈夫だ、俺はそんな当麻を応援している」

「だったらさり気なく後ろに下がつて逃げないで！ 畜生不幸だあああああああ！」

さて、こじりで当麻をおじょくるのはやめようか。で、あの子禁書田録だけ？ あの子は当麻に壊された服（修道服？）を安全ピンで直してみ。

当麻曰く、右手で触れたらぶつ壊れたそうな。

「つーことは、その服は異能の力で作られてたのか?」

「多分な…」

修道服つてことはシスターさんつてことだよな。」の近くに教会とかあつたつけか?

「…ド、ドのナニダ、ウカヘんだ？」

「アーッだな…、とつあえず『やつと直つたんだよー。全部あなたのせいなんだよー』ってさやああああああああー。それから本当に不幸だああああああー！」

「だああああああ！ いきなり噛み付こうとするな！ 話が続かな  
いだろうがああああああああ！」

俺らが話している間にインデックスが服を直し終えたらしい。そして流れるような動作で当麻の頭に噛み付く攻撃。当麻はひるんで動けない！　つてどうでもいいわ！

(なんでもかんでもポケンで考える癖はどうにかしねえとな…)

そんなことを考えつつ、当麻を救出することにした。

さて、現在インデックスの話を聞いてる訳だが、結構ヘビーな内容だぞオイ。

簡単にまとめて見ようと思う。

- ・ 彼女は「必要悪の教会」ネセサリウスの魔術師でありシスターである。
- ・ 完全記憶能力がある。
- ・ 一年間ほどの記憶しかない。
- ・ 同じ必要悪の教会の仲間から追われている（はいココ重要ー）
- ・ 十万三千冊の魔道書をもっている。

ま、こんなところか。

「理由はよく分からんが、ヒートH仲間もいたもんだ」

セレ、どうしたもんか。追われている身であるな「ま、なおセレ、どうかでかくまつても、もう必要があるが……」。

「じゃあ、そろそろ私はいくね」

「ちょっとましや」

「うつむちが考えて、この間に此処から去りうとすんな！」

「追われているのに勝手にどこかに行こうとするんなー、つかまつたらどうするー？」

「私の服には魔力があるからね。敵はこれをサーチしているみたいだから何処にいても変わらないよ。とつまもただかずも部屋」と爆発されたくないでしょ？」

確かにその通りだが……。

「でもよ、それってちいへマズいんじゃないのか？」

「そうだね。けど大丈夫。教会までいけば匿ってくれるし、歩く教会だつてあるしね」

「おいでつて」

当麻がインテックスを呼び止めようとする。当麻は正義感が強いし、困っている人を見ると放つて置けない性格だ。おかげで貧乏くじ引いたり、自身の不幸を招いているわけだが。

ま、それがここにないこと」ひるだ。

「あつがとう。心配してくれて」

確かに本気で当麻は心配してくる。だが、いつもいつも想つてゐるかな  
らおとなしくしてじてくれよ。

「さういふんだよ。これ以上私がここにいると、いつまどただかず  
に迷惑をかけちやつから」

「おこ、別にそんなことせ……」

「じゃあ、私と一緒に地獄の底までついてきててくれる?」

「うーん?」

その声が、あまりにも寂しげで。

その日が、己の運命を悟つてゐるようだ。

その日は俺が良く知つてゐる日だ。

「じゃあね。とつまの『ご飯おいしかったよ。ただかずも本気で私の  
心配してくれてありがとう。二人ともいい人だね』

彼女が十字の印を切つて、パタパタと部屋を出て行く。

「……………クソが」

思わず悪態をつぐ。イントックスにキレているわけじゃない。

ただ、この何故かもやもやする感覚が氣に入らないだけだ。

「……………なあ」

「……………あした、当麻」

「とんでもござりこんでせうが……、もつまほ遅刻確定だぞ」

……………オイロア。

「何？ 何であの後にそんな発言ができるのですかアー！？」

「まてまてまて！ 上條さんが悪かった！ だから部屋の中で能力使わないで！」

当麻は「んなに氣読めなかつたんですか！？ 幻滅したわ」「ん齋生！」

「…………まあいい。やつをと向かつた」

「「ゴメンな。惟数まで遅刻にさせちまつて」

「何言つてんだ？ 遅刻するのはお前だけだぞ」

は？って顔してるな。ま、当然だが。

「えーと、本道さん？　あなたは何でまるで飛び降りるみたいな体勢なのでせつか？」

「決まってるじゃないか」

それを聞いてから、手すりから飛ぶ。一瞬だけ、重力に従つて下に落ちる。

ただ、それは一瞬だけ。落下感から浮遊感に切り替わる。そしてその浮遊感も直ぐに終わる。

「じゃ、ねえきに失礼するぜ」

「おこりよつと待て…」

その言葉は聞きつけられない。当麻の言葉を聞き終えた瞬間、一気に加速する。

イメージするなり、俺の脚からジロツト噴射させて飛行してゆくように、俺は飛んだ。

「じゃ、また学校で会おひばり…」

「待ってくれ！　畜生！　本当に不幸だああああああああああああああああああああああ…」

当麻の声なんて聞こえない。聞こえなかつた。俺のログには何も無

かつ  
た  
！

## 第一話（後書き）

民  
い…。

## 第三話（前書き）

ようやく美琴と出合いました。

レベル5の序列の意味ってこれであつてるよね？

「はーい。それじゃ先生プリント作ってきたのでもず配るですー。  
それを見ながら今日は補習の授業を進めますよー？」

能力で滑空してきた俺は余裕で到着したが、当麻はぎりぎりだった。  
それにしてももう一学期たつけど、未だにありえないと思いつ。

我がクラス一年七組の担任、月詠小萌先生は身長135cmという  
どっからどう見ても小学生にしか見えない人なのだ。学園都市の七  
不思議にすら指定されてる。

ちなみに俺は補習を受けていない。小萌先生のサポートをしている。  
いや、一応これでもレベル4ですよ？ 入学前はどうなるかと思つ  
ていたが、そうビクビクする必要も無かつた。

当麻のおかげで友達も増えたし、あいつには感謝しきれない。

まあ、それはともかく。本来補習を受けなくてもいいのにレベル4  
といつことだけで手伝いをやられてるんですよ。面倒くさい。

「…ロリコンの上にMかテメエ！ 全く救いようがねーなー！」

「あつはーっ！ ロリ『が』好きなんぢやうでーっ！ ロリ『も』  
好きなんぢでーっ！」

「オイそこの人。そんなに机を高速で飛ばしたもののが喰らいたい

のか？「

「「いいえ。滅相も無いですー。」」

青い髪のピアス男（通称青ピ）と当麻がギャンギャン喚くので驚いて黙らせる。

やれやれとその二人をジト目で見ながら補習時間が過ぎていく。

空気中の窒素を操ることができる、それを用いて物を吹っ飛ばしたり、自身の移動等に使うことに対応した能力である。

これを応用する」というのが向かってくるものの軌道を変えたり、急上昇、急降下、急旋回、加速と移動なら何でも「どれな能力だ。」

といつても何でも軌道を変れるわけでもなく、多対一だと「圧倒的に弱い能力だ。」

で、何で「こんなことを説明してかかるって言いつて、

「あつ。いたいた。ちよつとアンタ！ 今日とこつ今日は絶対に決着つけてやるから覚悟じり」「ハハハ…！」

田の前に、とてもお嬢様学校に通つ中学生とは思えない口の悪さの戦闘狂がいたからだ。

「いい加減にしてくれよ電撃女……。こつちは補習で疲れてるんだから帰宅していただければ幸いなんですが」

「誰が電撃女よー。私には御坂美琴つづりやんとした名前があるのよー。」

本当によく叫ぶ女だな……。いつもしては静かな方が好みなんですよ。

「そもそも何で俺を追つかけてるんだよ。俺は電撃放たながら追われるよつの趣味は持っていないぞ」

「アンタが私との勝負を断るからいけないのよー。」

理不尽な。そもそも俺といつが出会ったのはまだ当麻のせいだつたりする。

アイツが何時ものように人助けをした。その助けられた奴がコイツ、御坂美琴だった。

どうやら助けられたのが気に食わなかつたよつで、タッチは電撃といつ死の鬼じつこをスタートさせた。

逃げてる途中で俺と会い、逃げる手伝いをしてやつた。（進路をふさいだり、当麻を窒素で加速させたり）

その現場を見たコイツが何故か俺にまで電撃を浴びせようとしたので、逃走。

それ以来、見つかつたら毎回のように勝負を挑まれ続けている。

……俺が助けなければ良かつたのか？

まあ良い。とりあえず勝負を受ければ開放してくれるらしい。

「じゃあ俺とお前が勝負したら、俺を追つかけてこないんだな？」

「わうよ。その気になつたんならわかつて始めるわよー。」

「まあ待て。勝負を受ける代わりに、俺が勝負のルールを決めるぞ

「ハア？ そんなことしたらアンタが有利じゃないの

「学園都市第三位の超能力者（レベル5）は大能力者（レベル4）に対してもハンデもくれないのか？」

「ぐッ……」

この反論でコイツも黙る。当然っちゃあ当然だが。

能力の強さには6段階ある。無能力者（レベル0）がもっとも弱く、超能力者（レベル5）が最も強い。

その超能力者も学園都市に7人しかおらず、コイツはその中の三番目である。

ちなみにこの序列は強さではなく、能力研究が生み出す利益が基準である。

「……良いわ、ルールくらい決めさせてあげるわ」

「そりかそりか。後悔するなよ？」

まあ、このルールだと圧倒的に俺の方が有利だからなあ……。俺のシマジヤ今のノーカンだから、なんて言われるわけにもいかない。

「ルールは鬼ごっこだ」

「鬼ごっこ?」

「そ。能力使用ありで一時間の耐久レース。お前が鬼で俺が逃げる。一発でも俺にダメージを加えられたらお前の勝ち。一時間逃げ切れ

ば俺の勝ち。どうだ?」

「一発でもつて、私が少し有利じゃない」

「逆に考えれば、俺は逃げる」とだけを考えればいいんだだけじゃな」

「……いいわ。その勝負、乗るわ」

「つしゃー。乗つてくれた。これで俺の勝ちはほぼ確定だ。

「よし。それじゃ俺は今から逃げるが、お前は5秒後にスタートな。同時じや俺が瞬殺される」

「かまわないわ」

「やつか。じゃあな」

「へ?」

今まで逃げると飛んで逃げなかつたからなあ。これで俺の勝ちは決定だ。

「あばよ、とつあああん!」

マイツがあつたらいでいる間に最高速での場を離れる。

この時ほど、この能力があつてよかつたと黙った田はない。

ちなみにこの後、悔しかつて叫んでいた第三位がいたそな。

## 第三話（後書き）

次回はスタイル戦かな

## 第四話（前書き）

一ヶ月も待たせてしまつて、「めんなさい。スタイル戦……前半です。

後半はしばらくお待ちください。

## 第四話

「よひと」

あの電撃女から逃げてからおよそ一分。俺は窒素を使った加速によつてあつといつ間に自分の寮に戻つてきた。

俺の部屋はこの寮の七階にあり、隣は眞麻が住んでいる。Hレベーターが無ければキツイ高さだ。

「ただいま。誰もいないけど」

くだらない事を言いつつ、部屋に入る。

ちょうど時間は毎週水曜日。高校男子としては、腹の具合がヤバイ。空腹で死にそうだ。

「取り合へずラーメン食つてから行動しますか……」

学園都市で有名なインスタントラーメンを作つつつ、冷蔵庫にあつた物のリストを作る。

今思えば冷蔵庫の故障はある電撃女せいな気がしてきた。

「いやまさか……、まさかなあ……」

そんなわけは無こと否定できるだけの要素がないことに少し、ほんの少しだけ申し訳なく思えてきた。

タイムセールの時間に買い物に行くのは、この寮で生活している奴では当たり前のことで、奨学金がただでさえ少ないので、娯楽にもろくに使えない。

そんな奴らと生活していると、それなりに奨学金をもらひたる高能力者の俺でもそんな生活になつていいく。

娯楽もゲームだけだし、一つのソフトで何年も遊べる。

まあ、今はそんなこと畢つでもいい。今本当に大事なことは

「……インテックス？」

麻の部屋の前に倒れている、今朝見た少女だった。

はは、きつと空腹に耐え切れなくなつて此処まで来たんだろうな。  
そんで腹が減りすぎて此処でぶつ倒れたんだろう？

でも、もしかうだつたら、

血がこんなに出ているのもおかしいよな？

「うー、おー、しつかりしるー。」

その場から全力でインテックスに近づく。遠田では分からなかつた  
が、背中から出血しているみたいだ。

取り合えず、この出血をどうにかしないといけない。優先順位はそ  
つちの方が上のはずなのに、

「へやッ！ ビリしてだよ！ 誰がコイツをこんな目にあわせたんだよー！」

「ん？ 僕たち、魔術師だけど？」

誰かにぶつけた訳でもない怒りに、誰かが反応した。

「ツー？」

さっきまで誰もいなかつたはずの後方に、身長2mを超える大男が立っていた。

神父の服装をしていながら、派手なアクセサリーをつけ、髪は真っ赤に染めて香水の匂いがする。よく見ると右目の下に、刺青なんかしてやがる。しかも、煙草まで吸つてやがった。

「人払いをしていたはずなんだけどね。何かでその効果を防いでいるか、もしくは魔術が利きにくい体質なのか……。できれば後者だと言つことを望むけどね」

「何言つてやがる……？」

訳が分からん。本当に、魔術師なのか……？ 仮に本当に魔術師だとしたら、コイツはインデックスの10万3000冊の魔道書とやらを狙つてゐる……？

「おい、お前はインデックスの魔道書を狙つてるんだよな……？」  
「やつぱり彼女から聞いてたのか。そうだよ。それがどうかしたのかい？」

「……あいつは何処にそんな物を持つてやがる？」

そんな量を持てるわけが無い。確かにインデックスには魔力が無いとか言つてたから、魔術を使つているつて言つ線もない。

「彼女に聞いてないのかい？」こだま

奴が自分自身の頭を指差す。頭……？

「彼女は完全記憶能力者……。それを聞いているなら分かるはずだけれどね」

「……！ そ、うか、記憶してるのは！」

それなら全ての辻褄が合つ。インデックスが何かを隠してると思つていたが、全部事実なんじやないか。

「彼女の保持している魔道書は、使いこなすことができれば世界の理をひっくり返すことができるほどの代物なんだ。おとなしく、彼女を渡してくれないな？ 答えによつては、実力行使も厭わないよ

答えねえ……。もう答えは決まっている。

「そうだな……。あんまり俺は戦うことが嫌いでね。できれば俺に被害が加わらないことを望むわ」

「ふうん……。なかなか賢明な判断じゃ」

「つで、今までの俺なら言つてたな」

あのバカの影響かな……。厄介ごとだらうが、お人よしだらうが、介入させてもらいたい。

ふざけた因果で手に入れてしまったこの能力、誰かのために使ってみるのも

「もう誰も傷つけさせねえよ。それが身内だらうが、赤の他人だらうが、な」

悪くない！

「そうか、それは残念だよ。僕にはどうこうアレで命を粗末にしょうとするのか、分からぬけどね」

大男は呆れたように呟く。そして、続ける。

「僕の名はスタイル＝マグヌス、と、言いたいところだけど、此処は『Fortis931』と名乗らせてもらつよ」

「どっちでもいいだらうが」

「まあそういうなよ。これも魔術師の習慣みたいなものなのさ。魔術を使うためには、この魔法名を名乗らなければいけないのさ」

「面倒くさこな」

「全く同感だよ。ちなみに日本語では強者、と言つたといふが

スタイルと名乗った男はそう吐き捨てる。

「まあ、重要なのは魔法名を名乗ることですね、この魔法名はいわゆる

そう言つて、煙草を投げ捨てる。

「殺し名かな

そうこうした直後、投げ捨てた煙草の炎がより一層、てかあり得ないくらいに燃え上がる。

「あつっ! -?」

「『炎』

そつスタイルが呟くと、煙草の炎が奴の掲げた手の上に集まつてくる。

その炎は、いわば『メラーマ』クラスの大きくなつていた。

「『巨人に苦痛の贈り物をツ...』」

その『メゾーマ』を俺に投げつけた……ッ。

『ツツツ……

「……………せつすぎたかな」

田の前に広がる光景を見て、スタイルはそう呟く。

田の前に広がるのは炎の海。直撃すれば人なんて一瞬で蒸発するほどの温度だ。塵すら残らない。

「そんなんじや、何回やつても僕には勝てないよ」

そう呟いてこれからのことを考える。

彼女に直撃させなかつたが、どう考へても遠回りしないと彼女を回収できない。我ながら面倒なことをしてしまつたと、スタイルは思う。

（やれやれ、一回階段で降りるしかないか……）

そう考へてスタイルは階段へ向かつ はずだった。

「鬼をソレドウア、手のなる方へつてなアー！」

「ツー？」

スタイルは嫌な予感を感じ、直感的にその場から離れる。その直後、

「スウパアイ ズマア キイイイッククッ！」

さつき焼き殺したはずの少年が、外から凄い速度のとび蹴りをかま

していた。

ズツドオオオオオオオオオオオオオオオンッ！！

外した。当たつた場所の鉄の扉が凄く拉げている。

だけど痛くはない。普通の人間がこの速度で何かに突っ込んだら、間違いなく死んでいる。

「お姫様の層のおかげだ。 能力に感謝しないとな。

「セア、魔術師さんよ。 覚悟は出来てんだけなア？」

「セア、魔術師さんよ。 覚悟は出来てんだけなア？」  
もつ迷わない。 直感通り、インテックスを守る為にこの能力を使つてやる。

魔道師だらうがなんだらうが、 関係ない。

「お前の人生と同じように、 ここから先は行き止まり（トッピング  
ド）だア！ 死にたくなきや、 とつとと引き返しなア！」

さあ、死合の始まりだ。

## 第四話（後書き）

後半は出来るだけ早く書きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3541v/>

とある窒息の置き去り（チャイルドエラー）

2011年9月26日02時02分発行